

## 華府 (一)

長い単調な大陸横断を終えて、ワシントンに着いたのは八月十九日の朝だった。まずホテルを決めて、首都滞在中の色々の計画を練った。ホテルは勿論中流以下のもので、食事ぬぎで宿泊料が四ドル五十セント（約千六円）。勿論バス付で換気冷房になっている。そのホテルは偶々田舎から家族連れで都見物にやって来たお客で賑わっていて、私の部屋がとれたのは漸く夕方になってからだった。行く当てもないので一日ホテルのロビーでごろごろしていたが、驚いたことには、田舎から見物に出て来た見物客も日曜日の午前には一室に会して、牧師を呼んで日曜の礼拝を忘れていないことだった。

ロビーにいる私のところへ一人の敬虔な老婆が来て、「これから一同は日曜の礼拝をするから静かにして下さい」といって来たので、漸くアメリカにおけるキリスト教の伝承の根強いのに感心した。当日私を訪ねてくれた大蔵省の渡辺財務官も、まず日曜日に何処かの教会に行ってみないと本当のアメリカ人の生活は分らないよ、といていた。

月曜日は陸軍省で占領地から来る人々を世話しているワン博士に会って色々の話を聞いた。博士の祖父はドイツからイリノイ州に移住して来たもので、現在でもイリノイの田舎には兄がいて百姓をしているそうだ。現在のアメリカの人口は一億五千四百万だが、その中の五十パーセントがイギリス人の系統で、十五パーセントがドイツ系で、黒人が九パーセント、東洋人が僅かに一パーセント、残りの二十五パーセントはロシアやスカンジナビヤからイタリヤに至る西欧系のものだ。この人種のカクテルのような状態が、今日及び明日のアメリカにとってどういふ問題を孕んでいるかは、後でもっと詳しく触れる機会があるうと思う。ワン博士のところに、五人のドイツ人が、私と同様にアメリカの勉強に来ていた。大体四十歳前後の人で、何でも農林省の役人だといっていたが、まず感心したのは服装がお粗末なことだった。服や靴は相当疲れたもので、泊っている宿は二ドル五十セントだといっていた。ギシギシしたドイツ語式の英語をしゃべっていたが、少しも卑屈なところがなく堂々としていた。文字通りの荒廃から再び立ち上ろうとするドイツ人の気魄にぶつかったような気がして、肅然とさせられた。

午後はワシントン大学にグレイ教授を訪ねた。この人はアメリカ史の担当教授で小柄な稍々神経質のような人だった。アメリカは伝統が浅いので歴史という程の歴史もありません。」と

謙虚に語り始めたが、「このアメリカの大陸は全部が移民の開拓した大陸です。まずこの大陸を発見し開拓し、そこに高度の古代文明を築き上げたのは他ならぬ東洋人です。それはこれから一万五千年位昔からコロンプスのアメリカ発見の年、即ち西暦一四九二年までのことです。今日とどこどこに残住している所謂アメリカン・インディアンというのは実はモンゴル系の東洋人で、シベリアからアラスカを経てこの大陸に入りこんで来たものです。ただ一つの集団と他の集団との間に闘争が続き協同精神が欠けていたことと、面白いことには酒の製法を知らないで労働や気候に対する抵抗力が弱かったため、十五世紀末から入り込んで来た西欧の移民との闘争に負けたのです。そして今日まで南支の福建あたりからきた中国人や日本の移民などと併せて全人口の百分の一即ち百五十万人が東洋系になっているに過ぎません」となかなか雄弁に語り始めた。

「そしてこの移民ということと、もう一つは開拓者精神というものが、アメリカの歴史を理解する上において見逃してはならない要素です。十六世紀にアメリカに移住してきた西欧人の一割はインディアンに殺されています。中には一つの集団移民の九割までが殺された例があります。そういう苦闘をなめつつ、西へ西へと開拓して行った不屈の精神をぬきにして、アメリカ

力の今日の発展を論ずることは出来ません。アメリカ人は物質的だといわれますが、西欧の旧社会からこの原野に渡ってくるのはよくよくのことで、なる程宗教的自由や政治的自由を得たといふの願望もあつたが、何といつても自分達の生活をよりよくしようといふ物質的理由が一番大きかつたわけです。よりよい将来といふ願望をもって、それが一つ一つ立派に成功して来たのですから、今日のアメリカ人の持つている樂天的な考えも、そういう背景からみていただくとよく分ります」とやや紅潮して教授は起ち上つた。

## 華 府 (二)

八月二十三日の午後と二十四日の午前は市内と郊外の見物に出掛けた。私の興味の中心は、勿論有名なホワイトハウスや国会を見たいことと、黒人の生活ぶりを見たいことだつた。ワシントンの人々は旧市内が八十萬、郊外を加えると百二十五萬といわれているが、その約四割が黒人であるといわれている。

先ず市の北部にある黒人街を覗いてみた。煉瓦造りの二軒建または三軒建アパートが多いようで、そこには小学校、中学校、高等学校、師範学校から大学が立派に建てられている。勿論ニグロだけの学校である。なかんずく一番特徴的なのは、このニグロの大学即ちハワード大学が唯一の連邦政府の経営にかかるもので、その設備の充実、その内容の優秀は白人の大学に劣らないものだそうだ。アメリカには大学が一千八百程あるが、その大部分が州立又は私立で、このハワード大学だけがいわば唯一の官立であるわけで、現在学生が五千人も在学している。

白と黒との問題は、いまアメリカが直面している内政問題で一番厄介な問題である。勿論長い間の闘争の結果、形式的な資格に於ては、白と黒の学校に差別はなくなったが、実質的には依然として相当の差別待遇があるようだ。最近になって白の大学が黒人に門戸を開放することになったことは大きい進歩で、このハワード大学も、逆に白人の入学を認めなければならぬまいと案内の人はいつていた。

黒人街は、これといって白人街と区別される所がない程立派なものである。第二次大戦後における黒人の経済的地位は、飛躍的に上つてきて、バックカードとかキャデラックという高級自動車を取り回しているのも多く見受ける。また一概に黒人といっても純粹に黒いのもいれば、

大なり小なり白人の血が混っているものが多く見受けられる。逆に白人の中にも多少黒人の血が混ってきている。この混血状態から全然純粹であるというアメリカ人は案外少ないのではないかと言われている。ここにアメリカの将来をかける謎がかくされているような気がする。

次にワシントンの郊外に出てみると、ここでもサンフランシスコにおけるように都市の郊外への膨脹傾向を鮮かによみとることが出来る。またそこには、コムニテイ・ビルデングといって、いわば一般市民の娯楽用に建てられた公会堂のような建物とか、カンツリークラブといってお金持の連中がクラブを作つて、ゴルフやテニスその他の運動や娯楽を共にしている施設も散在している。またカトリックを筆頭に各宗派が教会や学校を建てて経営しているのが多く見られる。

再び市内に帰つて美しい並木街を通つて中央繁華街に出ると、各官衙やホテルやデパートの大きい建物が軒を並べている。ここには二十階三十階という高層建築はない。もとは沼沢地であつた広い原野をワシントンが選んで連邦政府の首都にしたのだから、すべてが計画的にゆつたりと建てられている。街の名は連邦を組織している各州の名をとつていて、それがホワイトハウスと国会を中心に配列されている。ホワイトハウスは御承知のように大統領の官邸だが、

目下修理中で、トルーマン氏はその近傍の小さい家に住まっている。国会は上院と下院の二院制度だが、目下下院は休会中で、上院のみが開会していた。建物自体は古くて日本の国会の方が却って立派な感じがしたが、壁画とか石像が多くて、アメリカの光輝ある歴史を刻んである。大勢の見学者が、自由な気持と態度で参観に来ているのは、微笑ましい光景である。この国会附属の図書館は立派なもので、日本の書籍だけでも三十万部蔵しているのだから、他は推して知るべしである。

国会の隣りに最高裁判所があり、この建物は一九三三年に八百万ドルで造つたという石造の建物だが、首石は各州からとつて来たもので、柱は全部大理石からできている。ここには九人の判事がいるが休暇中で会えなかった。法廷内に参観人が自由に出入して、あすこに裁判長が座るんだとか、あの席には先任順で誰が座るんだとか、あの判事は小さいから椅子が小さいの、だろつなんて噂しているのは、これまた美しい情景であつた。

また市内には、銅像が非常に多い。それは日本のように軍人ばかりではなく、大統領や文豪や外国人で米国で死んだ偉人だとか、南北戦争の時の看護婦だとかとりどりのものである。歴史に恵まれない若い国だが、その僅かな歴史をできる文藝家に攝取して、国民の精神を豊かな

高いものにしよとす努力が随所に現われている。全国の隅々から毎日多数の見物人がここに集ってくるが、こういう人達がアメリカを建てた先達の高邁で自由な精神を汲みとることができるように仕組んである。

そもそもワシントンはそついう構想をもつてはじめから計画され、建設された首都なのだ。そして今そのアメリカが光榮あるアイソレーション（孤立）の域を大きく脱却して、自由世界のリーダーとして、その歴史的使命を大胆に実践することになったのだ。してみると、このワシントンは、自由世界の首都とも言えよう。五十数力国の代表がここに集つて、猛烈な外交戦を戦わしている首都である。私はマサチュセツト・アベニューにある日本大使館（現在極東委員会の事務所となつてゐる）の前を徘徊して、奈落の底にある故國の将来を思つて暗然たる氣持に沈んだのである。そして再び自國の光榮をここに打ち立てなければならぬのだといふエモーションに駆られてしばし立退くことができなかつた。